

日本人英語学習者の自尊感情を 高めるために

—基盤となる尺度の作成*

安 田 利 典

1. 問題と目的

教育基本法第2条は、「個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養う」ことを教育の目標として掲げている。このことは、知識や技能の習得だけでなく、学習者が持つべき自尊心の重要性を示している。加えて、現行の学習指導要領においても、「生きる力」の一部として自分に自信を持つことが強調されている（文部科学省（2008））。また、近年、外国語学習者の自律が重視されつつあるが、「学習者が自身の学習に対して責任を果たす」という定義から見ても（e.g., Holec（1981）, Wenden（1991））、自己肯定的な学習者という解釈は十分に成り立ちうる。実際に Wenden（1991）は、自信を持った学習者（self-confident learner）をその条件のひとつとして明示している。外国語教育における最大の目的がコミュニケーション能力を含む目標言語への習熟や異文化理解であることは自明だが、こうした理念を鑑みるに、外国語学習を通して日本人学習

* 本稿の完成にあたり、編集委員長の野村忠央先生、そして匿名の査読委員の先生には、内容や書式に関する丁寧かつ有益なご助言・ご指摘を頂きました。この場を借りて、深く感謝申し上げます。残る不備、遺漏は筆者一人に帰せられるべきものです。本研究の実施にあたり、平石賢二先生（名古屋大学）から尺度の使用と文言の変更についてのご許可を頂きました。心より御礼申し上げます。また、原田哲男先生（早稲田大学）には研究に関して丁寧なご指導を受け賜りました。記して、深く感謝いたします。

者の自己肯定的感情を高めるという側面がいかに重要かを伺い知ることができる。本稿は、学習者が自身の自己肯定的感情について知り、高めていくための質問紙尺度の基盤作成を目指すものである。

自己肯定的感情をあらわす概念の1つに自尊感情 (self-esteem) がある。一般的に、自尊感情は個人が自身に対して持つ包括的な自己評価であるとされ (e.g., Harter (1999))、適切な自尊感情の維持は人が生きる上で不可欠である (Ávila (2007))。したがって、上述の個人の尊重や「生きる力」に関する自信と相当程度に類似した概念であると言えるだろう。一方で特に教育の各分野では、自尊感情を包括的なものと領域特定のなものに分け、後者の自尊感情に着目することも多い (Neugebauer (2011))。外国語学習においても、目標言語能力に対する自己評価に焦点を当て、結果的にそれが包括的な自尊感情に影響するという主張がある (Ávila (2007))。このような関係性が必ず成り立つかについての議論もあるが (Harter (1985))、心理教育実践の側面からも、外国語学習を対象とした領域特定の自尊感情の育成が重要な目標の1つであることは間違いない。ひいては教育基本法の掲げる自身の尊重や、学習指導要領の言う「生きる力」につながる可能性もある。

さて、外国語学習を対象とした自尊感情を育てるにあたって、目標言語そのものへの習熟が重要な役割を果たすことは論を待たない。しかし、客観的に評価された実際の習熟度だけが自尊感情を育む唯一の決定要因というわけではない。学習者はときに自分の習熟度を主観的に評価する。しかし、これには過大、過小評価が残る可能性も高く、必ずしも自身の習熟度を正確に評価しているわけではない (MacIntyre, Noels, and Clément (1997))。すなわち、習熟度が高くても自尊感情が低く、逆に習熟度が低くても自尊感情は高いという状態が生じ得る。また、習熟度以外の要因にも目を向ける必要がある (Ávila (2007))。例えば、特定の目標に向かって意欲的に学習している場合、まだ習熟度が低い状態であっても自尊感情の高まりが生じることは想像に難くない。これは動機づけに関連した自尊感情であると考えられる。また、あまり好きではなかった受験英語から解放され、自分の好きな小説を英語で読破した場合にも、習熟度とは関係なく自尊感情が高まる可能性がある。これは学習方略の好みと選択に関わる自尊感情と言えるだろう。これらは、自尊感情が実際の習熟度に必ずしも相関するわけ

ではない、あくまで別の概念であることを示唆している。したがって、両者を同時並行的に高めていくための教育的配慮が必要であると考えられる。

ところで、特に日本人英語学習者については、自尊感情の低さを示唆する研究結果が多く、その必要性は高い。例えば、自尊感情と外国語学習に伴う不安の関係性が指摘されているが (e.g., Ávila (2007))、日本人学習者はこの不安が高いと考えられている (e.g., 八島 (2003), Yasuda (2014))。したがって、日本人学習者の英語に対する自尊感情には、より優先的に注意を払う必要があるものと思われる。

こうした教育的配慮を実現するにあたっては様々な方法論が考えられるが、関連したツールの開発は1つの有効な手段であろう。特に質問紙は、(1) 実施が簡易、(2) 自己評価が可能で自尊感情の概念と相性が良い、(3) 学習者の気づきを促すという点において有用である。しかし、日本人向けに作成された英語学習対象の自尊感情尺度は寡聞にして少ない。

ところで、自尊感情のような心理的概念を質問紙で扱う場合、その定義が重要となる。動機づけや学習方略のように、目標言語の習熟度以外にも自尊感情に関連する要因が多いことを考慮すると、ある程度の幅を持った定義を要すると考えられる。しかし、そもそも自尊感情の定義は未分化であり、その上、英語学習に領域特定の定義はほとんど見当たらない。田中 (2011) の心理学的知見から推察するに、自尊感情は、(1) 心理臨床における疾病モデルとも強く関連した概念であり、外国語学習という場面にいかに適用すべきか、(2) 欧米の社会背景を基盤に発達し、自己への尊厳や尊敬を前提としているため、文化的前提の異なる日本人にどのように適用すべきかといった問題を残している。そこで本稿では、自尊感情の類似概念としての自己肯定感に着目する。自己肯定感はポジティブ心理学の影響を受けて発展したもので、(1) 必ずしも疾病モデルに基づいてはならず、(2) 自己の尊厳や尊敬よりは単純に自身を好ましく肯定的にとらえようとする態度を重視しており (田中 (2011))、日本人英語学習者にとってより適切な概念であると考えられる。本論文では、田中 (2008) の定義を引用し、英語学習に対する領域特定の自尊感情 (自己肯定感) を、「英語学習の過程や結果に対して、自己を前向きにとらえ、好ましく思うような態度や感情」と定義し、質問紙尺度 (日本人学習者用) の基盤を作成する。学習者が自分の自尊感情について知り、将来どのように高めていくかを考

えるためのツールの作成を目指すものである。

2. 方法

2.1. 参加者

東京近郊にある複数の大学の学部生435名が調査に参加した²。日本人英語学習者の典型を反映するため、母語が日本語で、3ヶ月以上の海外滞在経験がない者を参加者とした。回答にミスのない372名をデータ分析の対象とし、その平均年齢は19.5歳であった。習熟度は、学内で実施されているオンラインのプレイスメント・テストにしたがって³、初級 (beginner)、中級下位 (low-intermediate)、中級上位 (high-intermediate)、上級 (advanced) の4つに分類された⁴。各級ごとの人数、およびTOEICスコアとの対照を表1に示す⁵。習熟度別の人数としては、中心 (中級下位、中級上位) が両極 (初級、上級) よりも多く、一般的な人数分布に比較的近いものであると考えられる。また、性別に関しては人数差が見られるが (女性105名、男性262名、不明5名)、大学学部生の在籍者数は女性よりも男性のほうが多いという実情を反映していると言える⁶。参加者の専攻は、教育学部 (教育学、英語、国語、社会、理科、数学の各専攻を含む)、社会科学部、商学部、工学部と多岐に渡っていた。学年としては、1年生261名 (70.2%)、2年生47名 (12.6%)、3年生31名 (8.3%)、4年生17名 (4.6%)、5年生以上5名 (1.3%)、不明11名 (3.0%) であり、授業などで英語と関わる機会が多い1年生が中心となっている。以上より、本調査の参加者は、現在の大学学部生の一般英語学習者の特性をある程度反映したサンプルであると考えられる。

表1. 各習熟度の参加者数とTOEICスコア (目安)

	初級	中級下位	中級上位	上級
参加者数	61	150	117	44
TOEICスコア (目安)	-365	365-555	555-690	690-

2.2. 質問紙と手続き

平石 (1990a) による自己肯定意識尺度の対自己領域19項目を一部改変して質問紙を作成した。当該19項目のほとんどは、平石 (1990b) におい

て、健康で肯定的な自己意識に関連する項目として抽出されており、疾病モデルを介さない本稿の定義に則している。また、「自己受容」「自己実現的態度」「充実感」の3カテゴリを含み、「自己を前向きにとらえ、好ましく思うような態度や感情」を幅広くカバーしていると考えられる。この19項目を「英語学習の過程や結果」に適用するため、必要に応じて文言を変更した。その後、英語教育と応用言語学を専攻する大学教員および大学院生が、英語学習に伴う自尊感情を表現するのに適切な文言かどうかを検証し、最終的に19項目全てを用いることとした。

調査は、2014年9月から12月にかけて英語の授業中に集団で実施され、形式は5件法であった（1＝あてはまらない、2＝どちらかといえばあてはまらない、3＝どちらともいえない、4＝どちらかといえばあてはまる、5＝あてはまる）。より正確な回答を引き出すため、結果を個表として参加者に返却すると回答時に伝え、後日フィードバックを行った。

2.3. 分析方法

Messick (1995) は妥当性の包括的な概念として構成概念妥当性を最上位に位置づけ、その中に種々の項目を含めることで、概念を再構成した。村上 (2006) は、心理尺度作成における構成概念妥当性の要件として、(1) 予測力、(2) 他のテストとの相関、(3) 妥当性の一般化、(4) 内容適切性、(5) 内的整合性、(6) 因子分析、(7) 弁別力、(8) 実験的介入、(9) モデルとの適合性の9つを挙げている。本稿では、このうち、因子分析、内容適切性、内的整合性を中心に論じ、尺度作成の土台を築く。これに伴い、最尤法、プロマックス回転による探索的因子分析を行い、理論および教育的有用性と照合の上、内容適切性を検討して項目を取捨選択し、最終項目におけるカテゴリごとの信頼性係数 α から内的整合性を確認した。

3. 結果

3.1. 探索的因子分析

全19項目の相関行列からは、特定の項目どうしの高い相関（.80以上）は見られず、他のいずれの項目とも相関していない項目（.30以下）もなかった。また、天井効果および床効果は見られなかった。よって、この時

表2. 英語学習を対象とした自尊感情の探索的因子分析結果

項目	因子			
	F1	F2	F3	F4 共通性
英語学習における自分の夢をかなえようと意欲に燃えている	.93	-.20	.08	-.07
情熱を持って英語学習に取り組んでいる	.84	-.10	.05	.03
英語学習に張り合いがあり、やる気が出ている	.62	.29	-.04	-.04
前向きな姿勢で英語学習に取り組んでいる	.48	.10	.14	.16
英語を学習しているとき、精神的に楽な気分である	-.05	.78	.03	.03
英語学習に対してわだかまりがなく、スカッとしている	-.16	.57	.08	.23
英語学習がすごく楽しいと感じる	.46	.53	-.03	-.13
英語学習をここから楽しいと思える日がない*	.39	.39	-.11	-.03
英語を学習しているとき、自分の個性を素直に受け入れていく	-.16	.00	.71	.16
私には私なりの英語学習があってもいいと思う	.15	.01	.54	-.32
英語学習において、自分の良いところも悪いところもそのままに認めることができる	.02	-.02	.53	-.12
英語を学習しているとき、自分なりの個性を大切にしている	.07	.05	.48	.31
英語を学習しているとき、自分の良い面を一生懸命伸ばそうとしている	.30	.16	.41	-.05
英語学習に満足感が持てない*	-.07	.03	-.15	.66
英語学習において、自分の好きなきなことがやれていると思える	.47	-.09	-.09	.51
英語学習に充実感を感じる	.37	.18	-.19	.45
自分のはのびのびと英語を学習していると感じる	.18	.17	.05	.37
因子間相関	F1	.73	.52	.65
	F2		.53	.68
	F3			.53

注) 表中の太字は、因子負荷量が|.35|以上であることを示す。*は逆転項目であり、表中の数値は逆転後の値に基づく。削除されたのは、「英語学習において、本当に自分のやりたいことが何なのか分からない」「英語学習において、自分には目標というものが無い」の2項目。

点では項目を削除せずに探索的因子分析を行った。平石（1990a）のオリジナルでは「自己受容」「自己実現的態度」「充実感」という3カテゴリを含んでいるため、因子数を3に固定した。すると、第3因子が2項目のみで構成され、適切な因子構造とは言い難い結果となった。そこで、この2項目を削除し、固有値の減衰状況から因子数を4にして再度分析を行ったところ、計17項目から表2のような因子が抽出された。回転前の累積寄与率は52.0%であった。なお、「英語学習がすごく楽しいと感じる」「英語学習をこころから楽しいと思える日がない」「英語学習において、自分の好きなことがやれていると思える」「英語学習に充実感を感じる」の4項目では、複数の因子に対して高い負荷量を示しているが、楽しさ、好きなことをやれる喜び、充実感は、いずれも英語学習に関する感情的側面として重要であり、自尊心に大きな影響を与えると考えられるため、負荷量のより高い因子内の項目として残した。Kaiser-Meyer-Olkin(KMO)の標本妥当性測度は.93でmarvelousに相当し（Kaiser and Rice (1974)）、Bartlettの球面性検定は5%水準で有意であることから、因子分析の適用は妥当であると言える。

3.2. 内容適切性

3.2.1. 因子の統合

一般的に、異なった因子は異なった概念として解釈されることが多い。しかし、Cohen (1988)の効果量の基準に基づくと、全ての因子間相関において.50以上と値が高く、因子の内容は部分的に類似している可能性が高い。特に、第2因子と第4因子は、平石（1990a）のオリジナルにおいて「充実感」という1つのカテゴリであり、主に感情的側面に関連するものとして他の2つのカテゴリと区分されている。第2、第4因子の因子間相関が.68と比較的高めであることも考慮し、この2因子を1つのカテゴリとして統合した。

3.2.2. 削除された項目の再考

「英語学習において、本当に自分のやりたいことが何なのか分からない」「英語学習において、自分には目標というものがない」という2項目は、探索的因子分析の過程で除外されている。しかし、因子分析の結果のみから

解釈を行うことが必ずしも正しいわけではない(松尾・中村(2002))。この質問紙尺度の開発の目的は学習者の気づきを促すことでもあるため、教育実践上不可欠な項目であればそれらを戻すことも考慮すべきである。当該2項目は、どちらも目標志向性に関連しており、英語学習で最も大切な要因の1つである動機づけに深く関わるものと考えられる。また、探索的因子分析で残った項目内には、「夢」や「目標」という文言でこの目標志向性を直接示すものが「英語学習における自分の夢をかなえようと意欲に燃えている」の1項目のみと少ない。したがって、当該2項目を、平石(1990a)のオリジナルと同様、「自己実現的態度」内の項目として含むことにした。

表3. 英語学習を対象とした自尊感情の尺度

	M	SD
英語学習に対する自己実現的態度 ($\alpha = .84$)	2.81	0.90
英語学習における自分の夢をかなえようと意欲に燃えている	2.66	1.20
情熱を持って英語学習に取り組んでいる	2.66	1.09
英語学習に張り合いがあり、やる気が出ている	2.71	1.11
前向きの姿勢で英語学習に取り組んでいる	3.13	1.19
英語学習において、本当に自分のやりたいことが何なのか分からない*	2.78	1.26
英語学習において、自分には目標というものがない*	2.91	1.38
英語学習に対する充実感 ($\alpha = .86$)	2.79	0.82
英語を学習しているとき、精神的に楽な気分である	2.62	1.18
英語学習に対してわだかまりがなく、スカッとしている	2.70	1.12
英語学習がすごく楽しいと感じる	2.76	1.16
英語学習をころから楽しいと思える日がない*	3.17	1.24
英語学習に満足感が持てない*	2.68	1.19
英語学習において、自分の好きなことがやれていると思える	2.65	1.07
英語学習に充実感を感じる	2.72	1.07
自分はこのびのびと英語を学習していると感じる	3.02	1.17
英語学習に対する自己受容 ($\alpha = .73$)	3.27	0.76
英語を学習しているとき、自分の個性を素直に受け入れている	3.10	1.07
私には私なりの英語学習があってもいいと思う	3.87	1.05
英語学習において、自分の良いところも悪いところもありのままに認めることができる	3.65	1.11
英語を学習しているとき、自分なりの個性を大切にしている	2.85	1.16
英語を学習しているとき、自分の良い面を一生懸命伸ばそうとしている	2.88	1.10

注) *は逆転項目であり、平均値は逆転後の値。

3.3. 内的整合性

探索的因子分析と内容適切性の検討を経て、合計19項目が3カテゴリに集約され、「英語学習に対する自己実現的態度」「英語学習に対する充実感」「英語学習に対する自己受容」と命名された。各カテゴリに含まれる質問項目は平石（1990a）のオリジナル尺度とほぼ同じであるため、同尺度に沿った命名となった。カテゴリごとの構成質問項目と信頼性係数 α 、質問項目ごとの平均と標準偏差を表3に示す。信頼性係数は順に $\alpha = .84$ 、 $\alpha = .86$ 、 $\alpha = .73$ であり、Nunnally（1978）に基づけば、内的整合性として問題のない範囲であると考えられる。

4. 考察

4.1. 作成された尺度

以下2点から、英語学習に対する自尊感情のための質問紙尺度の基盤が作成されたと言える。第1に、構成概念妥当性が部分的に実証されたという点である。本稿の自尊感情の定義を可能な限り反映するために、平石（1990a）の質問紙を改変し、分析対象となる質問項目を作成した。村上（2006）と照合して、探索的因子分析、内容適切性および内的整合性の検証の3プロセスを通して作成されたことから、構成概念妥当性の要件の一部が満たされたものと考えられる。加えて、平石（1990a）に含まれる3カテゴリとほぼ同様の構造を示しており、これは、英語学習に対する自尊感情が心理学的理論と構造的に類似していることを示唆するものである。一般的な自尊感情の特性が、英語学習に対しても反映されるものと推測され、その点でも本尺度の妥当性が示されていると言えよう。

第2に、本尺度が含む3つのカテゴリが英語学習の重要な側面と関連しているという点である。まず「英語学習に対する自己実現的態度」は、平石（1990a）が主張するように動機づけに深く関連している。言うまでもなく、動機づけは外国語学習に不可欠である（e.g., Dörnyei (2005)）。しかしそれは、外国語に習熟するための必須要件であると同時に、自尊感情を高めるためにも強く作用することになる。学習者がそれを意識することで動機づけの重要性を理解し、夢や目標についてより真摯に考えられる可能性がある。次に「英語学習に対する充実感」であるが、これは感情的側面に

関連しており（平石（1990a））、主に英語学習を通して得られる肯定的感情を反映しているものと考えられる。先述のように、日本人の英語学習に対する自尊感情を下げている要因には、否定的感情としての不安が挙げられる。英語学習で楽しさ、満足感、充実感といった肯定的感情を得るためにはどうすればいいかを学習者個々人が考えることは、不安の軽減という側面からも重要である。最後に「英語学習に対する自己受容」である。一般的に外国語学習では、ある一定の水準にまで目標言語の運用能力を高めることが目的となる場合が多く、「これでいい」という自己受容の感覚とは馴染みにくい部分もあるかもしれない。しかし、外国語学習には個人差要因が強く関わっており（e.g., Dörnyei (2005)）、各学習者が責任を持って自己を受容できるかどうかは非常に重要な問題である。

4.2. 本尺度の必要性

日本人英語学習者の自尊感情に配慮が必要なのは既述の通りだが、本稿のデータからもその自尊感情は決して高くはないことが分かり、本尺度の必要性を強調する結果となった。参加者は5件法で回答しており、各数値に割り当てられたラベルから、3を中心としてそれより値が高ければ高い自尊感情を、低ければ低い自尊感情を示すと考えられる。表3を見ると、全3カテゴリのうち「英語学習に対する自己実現的態度」($M = 2.81$)と「英語学習に対する充実感」($M = 2.79$)の2カテゴリで自尊感情が低くなっている。カテゴリごとに見ると、「英語学習に対する自己実現的態度」では6項目中5項目、「英語学習に対する充実感」では8項目中6項目、「英語学習に対する自己受容」では5項目中2項目において、低い自尊感情を示していることが分かる。この結果から、以下のようなことが推論できよう。昨今のグローバル化で英語の必要性が急速に高まっており、ほとんどの学部学生にとって英語が必修科目となっているが、社会的状況から英語が重要だと理解していても、「英語学習に対する自己実現的態度」に関連した目標や意欲を持たず、学習への失敗や挫折の感覚が残ってしまう可能性もあるだろう。また、「英語学習に対する充実感」が低いことから学習への取り組みそのものが阻害され、習熟への道を閉ざし、英語を使用して世界と関わっていく自信を失ってしまうかもしれない。こうしたことから、本尺度のようなツールを通して英語学習者の抱える自尊感情の問題を知り、どのよう

にアプローチしていくかを考えることは喫緊の課題であると言えよう。

4.3. 今後の課題

本稿で作成された尺度はあくまで基盤であり、さらなる改良が望まれる。村上(2006)による構成概念妥当性の9要件を極力満たすべく、他の質問紙との相関を算出する、自尊感情を高める教育的配慮の結果が質問紙のスコアに正しく反映されているかを吟味する、確認的因子分析でモデルの適合性を検証するなどは今後の課題である。また、本稿の参加者の属性を考慮すると、基本的にはEFL (English as a Foreign Language) 環境の大学学部生の学習者、あるいはそれと似通った特性を持つ学習者に対しての使用が望ましい。高校生や社会人の学習者に対しても有用であると推測されるが、使用に関する知見を蓄積し、必要に応じて本稿の内容に付け加えていくべきであろう。また、今後は、実際の教育場面で本尺度を用い、英語学習に対する自尊感情を高められるよう援助する実践的使用への考察も必要である。

注

1. 自尊感情と自己肯定感は異なった概念であるとする見方が多い (e.g., 田中(2011))。しかし本稿では、日本人英語学習者に適切な定義付けを行うために自己肯定感を用い、それを自尊感情という言葉で表現しており、ほぼ同義としてとらえている。外国語学習では、伝統的に自尊感情という用語の使用が多く、混乱を避けるためでもある。
2. 本研究では、まず大学学部生を対象として今後の基盤となる尺度を作成する。
3. テストは4つのセクションで構成されており、日常生活・学校生活・ビジネス現場などのシチュエーションを想定したものである。セクション1は語彙の知識を測定する4肢択一、セクション2は会話表現の知識を測定する4肢択一、セクション3は会話やニュースなどの大意の聞き取りを測定する4肢択一、セクション4は内容理解のキーポイントとなる情報の聞き取りを測定するディクテーション形式である。
4. 当該プレイズメント・テストを受験していない参加者については、授業を担当する教員と協議の上、4つの習熟度のいずれかに分類した。
5. 当該プレイズメント・テストとTOEICでは、測定の対象としている英語力が異なると考えられる。したがって、TOEICへの換算点はあくまで目安である。

6. 文部科学省の学校基本調査によると、2009年から2013年までの5年間に
ける大学学部生在籍者数の割合の平均は、女性41.5%、男性58.5%であった。

参考文献

- Ávila, Francisco J. (2007) "Self-Esteem and Second Language Learning: The Essential Colour in the Palette." In Fernando Rubio (ed.) *Self-Esteem and Foreign Language Learning*, 68-90. Newcastle: Cambridge Scholars Publishing.
- Cohen, Jacob (1988) *Statistical Power Analysis for the Behavioral Sciences* (2nd ed.). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Dörnyei, Zoltán (2005) *The Psychology of the Language Learner: Individual Differences in Second Language Acquisition*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Harter, Susan (1985) *Self-Perception Profile for Children*. Denver, CO: University of Denver Press.
- Harter, Susan (1999) *The Construction of the Self: A Developmental Perspective*. New York, NY: Guilford Press.
- 平石賢二 (1990a) 「青年期における自己意識の発達に関する研究 (I) —— 自己肯定性次元と自己安定性次元の検討」『名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科)』第37巻、217-234.
- 平石賢二 (1990b) 「青年期における自己意識の構造 —— 自己確立感と自己拡散感からみた心理学的健康」『教育心理学研究』第38巻3号、320-329.
- Holec, Henri (1981) *Autonomy and Foreign Language Learning*. Oxford: Pergamon Press.
- Kaiser, Henry F. and John Rice (1974) "Little Jiffy, Mark IV." *Educational and Psychological Measurement* 34.1: 111-117.
- MacIntyre, Peter D., Kimberly A. Noels, and Richard Clément (1997) "Biases in Self-Ratings of Second Language Proficiency: The Role of Language Anxiety." *Language Learning* 47.2: 265-287.
- 松尾太加志・中村知靖 (2002) 『誰も教えてくれなかった因子分析 —— 数式が絶対に出てこない因子分析入門』京都: 北大路書房.
- Messick, Samuel (1995) "Validity of Psychological Assessment: Validation of Inferences from Persons' Responses and Performances as Scientific Inquiry into Score Meaning." *American Psychologist* 50.9: 741-749.
- 文部科学省 (2008) 「中央教育審議会答申」(2015年8月27日検索)
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/pamphlet/_icsFiles/afieldfile/2010/09/08/1234786_3.pdf.
- 村上宣寛 (2006) 『心理尺度のつくり方』京都: 北大路書房.

- Neugebauer, Sabina Rak (2011) “A New Measure to Assess Linguistic Self-Esteem in Adolescent Latino Bilinguals.” *Hispanic Journal of Behavioral Sciences* 33.4: 425-446.
- Nunnally, Jum C. (1978) *Psychometric Theory* (2nd ed.). New York, NY: McGraw-Hill.
- 田中道弘 (2008)「Rosenberg の自尊心尺度をめぐる問題と自己肯定感尺度の作成と項目の検討」常盤大学大学院人間科学研究科博士論文.
- 田中道弘 (2011)「自己肯定感」榎本博明編著『自己心理学の最先端——自己の構造と機能を科学する』129-140. 京都: あいり出版.
- Wenden, Anita L. (1991) *Learner Strategies for Learner Autonomy: Planning and Implementing Learner Training for Language Learners*. London: Prentice Hall.
- 八島智子 (2003)「第二言語コミュニケーションと情意要因——「言語使用不安」と「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」についての考察」『外国語教育研究』第5号、81-93.
- Yasuda, Toshinori (2014) *Language Learning Strategies, Personality Traits, and Cognitive Styles of Japanese-Speaking Adult Learners of English*. Unpublished master's thesis, Waseda University.

(早稲田大学大学院生)

tyasuda@asagi.waseda.jp